

## 看護：基礎教育へのロール・プレイング導入の効果

千 田 好 子

### I. 緒 論

さきに筆者は「会話分析による看護の再検討」, 「会話場面から真の援助を考える」, あるいは「人間対人間の看護を手がかりに」について考究してきた<sup>1, 2, 3)</sup>。これらについてはすでに大段智亮, 伊東博, 畠瀬稔などが先鞭をなし, その効果の大なることを報じている<sup>4, 5, 6)</sup>。

筆者は成人看護学・外科系の担当者として 20 年間にわたって看護婦養成に携ってきているが, <人間を看護するという仕事は人間が相手>であることを第一義的なものとしてきた。外科看護学はたとえ<外科的技術>に重点があるとはいふものの, 外科的疾患に関する援助を求めているのは<人間そのもの>である。一方看護援助の実践は, 知識の集積よりも<態度の修練>が中心にならなければならない。また態度の修練・行動の練磨は行動学習・経験学習によって初めて可能になると考えられる<sup>7)</sup>。さらに行動学習・経験学習は抽象論や一般論が先行するものではなく<日常の仕事>や<生活の現実問題>を取り上げるところに成り立つものである。こうした考えで主宰された大段智亮氏の『看護人間学教室』に筆者はこれまで数多く参加してきた。

トラベルビー (Travelbee, J.)<sup>8)</sup> も看護援助を対人関係過程の上に成り立つと強調し, 看護婦が個人や家族, あるいは地域社会から病氣や苦痛の体験を予防したり, うまく対処できるように, そしてまたこれらの体験の中に意味を見つげられるように援助を展開するならば, 看護婦自身もまた人間の成長を得るものであると論じている。この点に関しては野島も未完成ではあるがと前置して, 「新しいパラダイムの成立する領域」を図示している<sup>9)</sup>。

筆者は看護学実践の確立を旨とする学生に対して, 看護学に関する基礎知識を教授することは必要不可欠であると思う反面, 看護学実習の実施に関しては<人間理解>と<自己理解>が優先されなければならないと考える。そこで合田富美子・岡山県立短期大学教授の

指導により, 成人看護学 (学校内) 実習の教科に『助力の人間関係づくり』を主眼としたロール・プレイング (以下 R. pl. と略す) によって会話場面の分析を行う手法をとり入れた。昭和 53 年より今日まで, この手法により『学生の演習』を実施し, 9 年間継続している。もちろん R. pl. の限界はあるものの, 本手法の短所を上廻る長所 (表 I)<sup>10)</sup> を学生たちは学び取っている。

今回の調査結果では, 学生は①探索的態度よりも理解的態度の割合が多く, ②人間は変化・成長する存在であり, 可能性に対する信頼が大切であり, ③看護者として必要な態度は, 「身構えないで素直であること」, 「相手を無条件に受け容れること」, 「共感的に理解すること」であることを知り, ④対話に必要な言葉の技術としては「簡単な受容」, 「内容のくり返し」, 「感情の明確化」によって, 相手が自分のことを見つめ, 建設的になるものであることを知ったと思う。そこでその経緯について報告し, ご批判を得たいと願っている。

表 I ロールプレイ I の限界と長所

〔学習方法としての限界〕

- (1) 演技の場面において, 周囲に観客がいるということは, どうしても実際のカウンセリング場面のようにはいかない。  
1) クライエントの役をとる人が, 観客を意識して問題をそらす。  
2) カウンセラーとして, 周囲を意識するために本当の力が出し切れない。  
(2) 時間の制約がある。

〔長 所〕

- (1) 研修者が実際のクライエントを扱う時に感じる不安, あるいは責任感から来る不安といったものを持たずにすむ。  
(2) 実際のカウンセリングでは, クライエントの感想をきくことが, 多くの場合不可能である。ロールプレイ I ではそれが可能であり, しかも直後にできる。  
(3) 研修者の態度として「診断的」「分析的」になる危険性を少なくすることができる。  
(4) いくつものロールプレイ I の場面を観察していると, かつて自分が扱ったケースのクライエントの, ことばや表情の奥に秘められていた深い意味 (今までわからなかったもの) に, 「こういう気持ちから出たのか」と気づくことがある。  
(5) 経験の浅いもの同志でも, 研究の成果を十分あげることができる。

〔定期的にもつ研究会ですときの長所〕 (略)

資料：広瀬米夫著<sup>10)</sup>, カウンセラーの自己訓練, 岩崎学術出版社, P 79 ~ 82

## II. 研究方法

## 1. 当該授業の概要

- 1) 授業科目；外科系看護実習Ⅱ（学校内実習）
- 2) 単位数；1単位（45時間）
- 3) 実習時期；2年次前期（4月～9月）
- 4) 教授計画（昭和61年4月～9月）；〔表Ⅱ〕
- 5) 実習方法；在籍学生を2分して2人の教官が担

当。全員参加（2回）とA・Bグループ別（13回）とに分け、筆者は24名を担当する（多くは6名宛の小グループで討議）。

6) 実習目的・目標；「人間相手」とはどうか、「援助」とは何であるかを検討し、どのような人間関係をもてば看護の展開が円滑に実施できるかを探ることを目的とし、目標は表Ⅱの通りである。

表Ⅱ 教授計画（昭和61年4月～9月）

回数	時間	方法	授業要目	実習目標
1	3時間	全員参加	1) オリエンテーション 2) <u>カウンセラーの態度分析調査</u> 3) 事例の検討	1) 授業目標の確認。実習方法と参加の心構えを知る。 2) 各自が被相談者になった時の態度傾向を知る。 3) ロール・プレイングの実例を知る。
2 } 14	各々 3時間	グループ 別（A・ B）	4) ロール・プレイング 5) <u>所感の提出（実習目標の達成度調査）</u> 6) 中間レポート作成（第7回目）	4) 体験学習により、援助的人間関係について、各自の態度を知る。 5) 授業に対する所感から目標の達成度を知る。 6) 人間理解・援助に関する各自の考えをまとめる。
15	3時間	全員参加	7) 実習のまとめ 8) 最終レポート作成 9) <u>カウンセラーの態度分析調査</u>	7) 自己の反省・評価を行い、次の実習への導入とする。 8) 逐語記録から、＜人の話を聴く・応答する・人を理解する＞に関する各自の考えをまとめる。 9) 演習により、各自の態度傾向がどのように変化したかを知る。

（註）表中の下線は本報告に関するものである。

## 2. 授業要目（具体的な授業の展開）

表Ⅱに示した『教授計画』の授業要目に従って、授業は次のように展開する。

1) オリエンテーション；授業目的・目標を示すとともに、実習へのとり組み・すすめ方・注意事項などについての説明を行う。

2) カウンセラーの態度分析調査；ある人が悩みを訴えた場合、自分だったらどのように応答するかについて「悩みの内容と応答例（表Ⅲ-1）」を示し、学生個々が自分の応答に最も近いものを選ぶ方法を用いて、初回と終了時の2回について調査する。

## 3) 事例の検討

あらかじめ用意した実際のR. pl.による対話場面（患者対看護師）を録音したテープと、その逐語記録のコピーを学生個々に配布して「対話の中での患者・看護師の感情の推移」に関して8つの小グループ毎に、時宜を得たものであるか否かについて討議させる。

4) R. pl.による体験学習；先ず4つの小グループ

毎に主題の決定・役割の決定（カウンセラー、クライアント）・場面設定を行わせる。次いで24名のグループに対して、小グループの主題をとりあげ実演させる。実演終了後には演者の感想を聞き、さらに録音したものを聞き返し、小グループ毎の討議を行い、相談者・被相談者の相互関係について意見を述べ合わせる。

教員は板書した意見にもとづいて、時には録音を例示しながら＜まとめ＞を行う。毎回の実演については実演者が逐語記録を作成し、後日の教材とする。

5) 目標の達成度調査（所感の提出）；毎回の演習終了時、学生の授業に対する所感については自由形式で記載・提出させる。提出された学生の所感はあらかじめ筆者自身が作成したチェック・リスト（表Ⅳ-1, V-1, VI-1）の分類に従い、所感内容を筆者の主観によって該当する項目に選別する。実習目標の達成度はチェック・リストの集計に基づいて「学生の反応」を確認して行う。

上記4), 5)のくり返しを14回（初回から14回まで）

行いR, pl.法による助力的人間関係について習熟させる。

チェック・リストは大段<sup>11)</sup>のいう①「基本的考え方」(表Ⅳ-1)、②「看護婦として必要な態度」(表Ⅴ-1)、③「言葉の技術」(表Ⅵ-1)という、面接技法に重要とされる三要素がR, pl.を経験することによって、どれ程度できてきているかを調査するためのものである。またチェック・リストの作成については、広瀬<sup>10)</sup>、飯田ら<sup>12)</sup>の著書を参考にして筆者自身が作成したものである。

6) 中間レポート作成(第7回目)；実習の中間(第7回目)には、『人間理解』や『援助』に関する多くの書籍中、筆者があらかじめ選定したものの中から各自1冊以上を読破させる。その結果については、2,000字以上の論稿にまとめて提出させる(「実習の評点」の資料の一つとする)。

7) 実習のまとめ；実習終了時、在籍学生全員を8つの小グループに分けて、15回の授業内容の把握と、再確認事項の列挙について検討させる。その結果については、小グループ毎に所感を口頭で発表させ、実習の反省・評価とする。

8) 最終のレポート作成；13回のくり返しR, pl.に

よって作られたカウンセラー・クライアント実演の逐語記録(12種、すでに24名全員に提示済み)の一つを選び、自由記載(2,000字以上)で論稿として提出させる。この論稿の内容は「人の話を聴くとは」「応答するとは」「人を理解するとは」などの例示に従って行わせる(「実習の評点」の資料の一つとする)。

9) カウンセラーの態度分析調査；最終回には、再び表Ⅲによって「学生の態度傾向」を調べて、初回との比較を行う。

今回の報告は表Ⅱの授業要目のうち下線の2)と9)のカウンセラーの態度分析、および5)所感による実習目標の達成度調査結果についてのみ行う。

### Ⅲ. 調査結果

#### 1. カウンセラーの態度分析調査

標記については表Ⅲ-1を用いた。すなわち、大段<sup>13)</sup>はポーター(Porter, E. H. Jr.)の態度分析をとり上げ次のように応答例を区分している。ただし今回の調査では応答例の例示順序を筆者があえてアトランダムに配列して回答の偏りがでないように配慮している。①評価的態度；相手の言葉に対して、その善悪・

表Ⅲ-1 カウンセラーの態度分析調査表

<p>A 「つまり、あなたは、生きる勇気がくじけてきたわけね」</p> <p>B 「そんな状態はいつ頃から起こってきたことですか」</p> <p>C 「一つ一つそんな調子では、ほんとうにあなた、神経衰弱ね。それでは疲れてあたり前ね」</p> <p>D 「現実から離れるということ、それが、あなたの問題だと思えますよ。何か手先を動かして物を作るような仕事に打ち込んだらどうでしょうか」</p> <p>E 「人間関係のなかで、むだな努力をして、疲れて、揚句は自分の立っている土台がくずれたように頼りなくなるといような気持ね」</p> <p>F 「そうね、誰でもそんな気持になる経験が一度や二度はあるわね」</p> <p>G 「それで、あなたのそういう状態に対して、まわりの人たちは、どういうふうに言いますか」</p> <p>H 「それでは困るね。そういう気持や迷いに流されてないで、前向きに闘わなくては」</p> <p>I 「あなた、ほんとうは、誰か好きな人がいて、その愛情が裏切られたために、そういう気持になっているのじゃないの」</p> <p>J 「生活のいろいろの営みが、みんな空しくなっちゃったのね」</p> <p>K 「何でもないことが、そんなに一々気になるのは、つまり、あなた自意識過剰なんだわ」</p> <p>L 「そうですね、対人関係に問題を感じたり、自己存在に空虚感を感じるの、あなたが得られる要求や能力があるからですよ。そこを通りこしたら、きつと精神の平安が得られますよ」</p> <p>M 「あなたのそういう状態になる原因について、あなた自身どう考えていますか」</p> <p>N 「それではね、そんな気持になった時は、私が話し相手になるわ。誰かに話をすると、少しは気が晴れるものよ」</p> <p>O 「あなたの心の奥底に、あなたにも気づかない欲求がかくされていて、それがそういう疲れや空虚感となつて、あなたをゆさぶっている、というふうに思うのですね」</p> <p>P 「なるほど、一々自分のすることが不思議に思えて、自分というものが空虚になつてしまふのね」</p>	<p>「私ね、こう、とつても疲れてるんです。人の前に出ると一生懸命努力して演技をするからでしょうね。だから人前に出るのがいやだ、それでひとりになる、ひとりになるから空想にふける、空想にふけるから現実と離れる、離れるから批判的に物事を見てしまう。それで、結局、自己存在というか、何のために自分は生きていんだろう、ああ、自分はどうして今ここに寝てるんだらう。何で起きてご飯食べるんだらう、と。おかしな話ですけどね、何でこういうことやるんだらうと、不思議な気がするんですよ」</p> <p>ひとりの若い女性が右のように訴えるとき、われわれは、どのように応答すればよいであろうか。あなたの取る態度は、次の言葉のどれが一番近いか記号で答えよ。</p>
--	--

効果・正しさ・適不適などについて判断していることを示すような発言(表Ⅲ-1のC, H, Kがこれに相当。以下同じ), ②解釈的態度;相手の言葉に対して, その意味を教える・因果関係を示す, という場合(D, I, O), ③調査的態度;いろいろの情報を求め, この点あの面について話をしてほしいと要求するもの(B, G, M), ④支持的態度;相手の不安を軽減し, 深刻な感情をやわらげ, 落ちつかせようと, ながさめ励ますような態度(F, L, N), ⑤理解の態度:相手の言葉・感情・ショック・知覚などを, 正しく理解しているかどうかをたずねているもの(A, E, J, P)の五つに区分して調査する。

学生の示した応答は表Ⅲ-2に示すとおりであり, 次のような結果である。

1) 初回の調査では, 支持的態度で応答するとした者が50%(12人)で最も多く, 次いで理解の態度が29.2%(7人), 調査的態度が20.8%(5人)で, 評価・解釈的態度は零である。

2) 最終回の調査では, 理解の態度の応答例を選んだ者は79.2%(19人)と, 初回に比べ2.7倍に増加している。一方, 支持的態度は16.7%(4人), 調査の態度は4.1%(1人)と減少している。評価・解釈の態度は初回と同様に零である。

表Ⅲ-2 カウンセラーの態度分析調査

態度のカテゴリー	対 象		最 終 回		参考調査(大段;看護婦対象)	
	人 数	百 分 率	人 数	百 分 率	人 数	百 分 率
評価的態度とみられるもの (C・H・K)	0	0	0	0	4	2.4
解釈的態度とみられるもの (D・I・O)	0	0	0	0	21	13.0
調査的態度とみられるもの (B・G・M)	5	20.8	1	4.1	56	34.6
支持的態度とみられるもの (F・L・N)	12	50.0	4	16.7	48	29.6
理解の態度とみられるもの (A・E・J・P)	7	29.2	19	79.2	33	20.4
計	24	100.0	24	100.0	162	100.0

註: 1) A~Pは表Ⅱ-1に掲げた応答例示を示す。

2) 参考例(大段の調査)については筆者が誤植の訂正を行ってある。

## 2. 所感による実習目標の達成度調査

1) 「基本的考え方」について;標記については, 表Ⅳを用いた。ここでいう『基本的考え方』とは, 「人間は無限の可能性をもっており, 自主的によりよく生きようと変化する存在である」という考えであり, これが面接における基本的要素になると考える。学生の所感を表Ⅳ-1のチェック・リストにもとづいて集計したものが表Ⅳ-2であり, 次下の結果が出た。

①カウンセラーに関するものでは, 相談者の自己理解を助けること, に該当するもの(表Ⅳ-1㉑, ㉒以下同じ)は18件(16人)であり, ②ロール・プレイングに関するものでは, ㉓グループ討議や録音の聴き返しにより, 助力的人間関係についての新しい気づきができる, に該当するもの(㉑, ㉒, ㉓, ㉔, ㉕)が

65件(22人)となっている。さらに㉖自己反省・自己理解ができ, 自主的な人間の育成につながる, に該当するもの(㉑, ㉒, ㉓)が89件(24人)であり, ㉔分類し難いもの(㉑, ㉒)は41件(24人)となっている。

2) 「看護者として必要な態度」について;標記については, 表Ⅴ-1の分類に従って表Ⅴ-2を作った。なおこの分類はロージャズ(Rogers, C. R.)によっている<sup>14)</sup>。すなわちクライアントのパーソナリティの変化をもたらすためのカウンセラー側の3条件(自己一致・受容・共感的理解)を基準としている。

調査の結果として①カウンセラーに関するものでは, ㉓自己一致であること, に該当するもの(㉑, ㉒)が16件(12人)であり, ㉔受容・無条件の積極的尊重

表Ⅳ-1 「基本的考え方」に関するチェック・リスト

ア	<カウンセラーに関するもの> 相談者自身が結論を出すよう対応すべきである(相談者の可能性を信じること)。
イ	自分とは考え方の違う相手を受け容れる心の余裕が必要である。
ウ	<ロール・プレイングに関するもの> グループ討議により自分の考え方が広がる。
エ	録音を聴き返すと、言葉や表情の奥に隠されていた深い意味に気づく。
オ	逐語記録から、人間関係のダイナミックスがわかる。
カ	「人間相手」とはどういうことかを考える。
キ	「援助」とはどういうことかを考える。
ク	自己反省・自己理解ができ自己成長につながる。
ケ	日常生活でも気をつけたい(将来役立てたい)。
コ	厳しい体験学習であり、自主的な人間の育成につながる。
サ	一般論で結論を出せないところが難しいが面白い。
シ	主題は参加者の関心が高く発達段階にふさわしいものである。

表Ⅳ-2 「基本的考え方」に関する学生の反応

学生 所感 分類	個人																								計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	件	人
ア	○	○	○		○	○		○	◎		○	○		○	○	○		○		○					16	15
イ													○					○							2	2
ウ					○	◎	○	○	◎	○								○	○	○	◎				17	11
エ	○								○	○	○				○				○			○	○		9	9
オ	◎				○			○		○				◎	◎				○		○	○	○		13	10
カ	○	○							○	○	○			○	◎					○					12	10
キ			○	○				○		○	○	○	○		○			○	○	○	○	○	○		14	14
ク	◎	◎	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎	◎	◎	37	19
ケ					○	◎	◎	○			○	○	○							○	○	○	○		12	10
コ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	40	21
サ			○	○	○			◎	○				○					○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	18	13
シ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	23	22
計	9	7	6	8	10	10	9	17	14	9	7	4	10	7	9	4	10	12	11	10	9	10	6	5	213	(平均) 8.9

注：◎は該当する応答が2回のもの、◎～◎はそれぞれ応答回数が3～6回を示す。以下、表Ⅴおよび表Ⅵも同じ方法で表示。

表Ⅴ-1 「看護者として必要な態度」に関するチェック・リスト

ア	<カウンセラーに関するもの> 身構えないで純粋・素直であること。
イ	問題の内容・ことがらにとらわれないこと。
ウ	本気で聴こうとする積極的の態度が大切である。
エ	相手のことば・気持をありのまま受けとめる。
オ	診断的構えよりも理解的態度をもつこと。
カ	相手を理解することは難しいが、理解しようと努力する態度が大切である。
キ	相手の気持を敏感に感じとり、適切に応答すること。
ク	<ロール・プレイングに関するもの> 態度を身につけるには、実践を通して行われる体験学習が大切である。
ケ	観客を意識するが自分の傾向は出るの、生活場面での自分の「クセ」がわかる。

表Ⅴ-2 「看護者として必要な態度」に関する学生の反応

学生 所感 分類	個人																								計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	件	人
ア		◎	○	○				◎	○		○	○	○					○	○	○	○				14	12
イ								○					○												2	2
ウ		○	○	◎	○	◎		◎		○	○	○			○					○	○	○			17	13
エ				◎				◎			○							○	◎		○	○			10	7
オ							○																○		2	2
カ	○	○	○		◎	◎	◎	◎		○	○	◎	○	○	○			◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	39	20
キ	○			○	◎	○		○	◎		○	○			◎		○		○	○		○			16	13
ク				○						◎			○	○	○			○		◎					9	7
ケ	○	○						◎				○	○							○		◎			9	7
計	3	5	3	7	6	6	2	12	5	4	3	8	5	4	1	3	6	6	10	2	5	6	1	118	(平均) 4.9	

が大切である、に該当するもの(㉑, ㉒)が27件(15人)である。さらに㉓共感的に理解すること、に該当するもの(㉔, ㉕, ㉖)は57件(23人)となっている。㉗ロール・プレイングに関するものでは、態度の修練には体験学習が大切である、に該当するもの(㉘, ㉙)が18件(11人)である。

3) 「言葉の技術」について；標記については表VI-1の分類に従って、表VI-2をつくった。なおこの分類はスナイダー(Snyder, W. U.)による発言分析<sup>15)</sup>

にもとづいている。

カウンセラーに関するものでは、①「質問・解釈・批判・是認」などの発言があると、クライアント中心の対話とはならない、に該当するもの(㉚, ㉛, ㉜, ㉝)は42件(19人)であり、②面接中の沈黙は大切である、に該当するもの(㉞, ㉟)が23件(13人)となっている。さらに③感情に対する非指示的な反応を示すとクライアントは自己理解ができやすくなる、に該当するもの(㊱)は14件(13人)となっている。

表VI-1 「言葉の技術」に関するチェック・リスト

ア	<カウンセラーに関するもの> 「質問」をするのと調査的となり話が 発展しない。
イ	「解釈」は解釈的態度につながり、相手 の言いたいこととズレが生ずる。
ウ	「批評・説得・提案」は評価的となり、 相手は反発してくる。
エ	「是認・再保証」は支持的な態度と直結する。
オ	面接中の沈黙には多くの意味がある。
カ	相手が考えをまとめている時の沈黙は待つこと。
キ	「簡単な受容・内容のくり返し・感情の 明確化」ができると、相手は自分のことを見つめて建設的になる。

表VI-2 「言葉の技術」に関する学生の反応

学生 所感 個人 分類	学生																								計		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	件	人	
ア													○	◎	○				○	○						6	5
イ			○						○	◎	◎				○					○	○					9	7
ウ			○	③	○		◎	○	○			○		③	③			○								17	10
エ				○	○					○	○	○	○	○	○	○	○			○	○					10	10
オ				○				○	○	○	○	○				○			○		○	○	○	○		10	10
カ				○	○			○	○	○	○	◎				○			○		○	○	○	○		13	12
キ		○	○	○	○			◎	○			○	○	○	○				○	○	○					14	13
計	1	3	6	5	0	2	1	5	4	4	3	7	3	5	7	2	3	2	1	5	3	2	3	2	79	(平均) 3.3	
表Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの合計	13	15	15	20	16	18	12	34	23	17	13	19	18	17	20	7	16	20	18	25	14	17	15	8	410	(平均) 17.1	

IV. 調査結果の考察と要約

1. カウンセラーの態度分析調査

表Ⅲ-2の参考調査で大段は「助力的関係をもつことを専門にしている看護婦たちでさえもなお、理解的な態度を意識の次元においてとりたいと考えているものが、全体の5分の1に過ぎないということである。私の予想では、大学生や知識階級の人たちにおいては、こういう場面で、ここにいわゆる理解的態度を選ぶ人は、いよいよ少ないにちがいないということである。」と述べている<sup>13)</sup>。また小滝はその割合については表示してないが、一般論として「一番多いのが調査的態度で、少ないのは理解的態度である。」と言っている<sup>16)</sup>。

今回筆者の行った調査では、初回で一番多かったのは支持的態度で50%を示し、調査的態度は約21%であり、大段調査の看護婦よりも低率である。また理解的態度は学生の方が看護婦よりも高率を示し、大段の予測とは逆となっている。また最終回の調査では、看護婦の場合には理解的態度とそれ以外の態度の比が1

：4であるのに対し、学生の場合ではその比が全く逆転して、理解的態度が約80%を占めている。これまた、大段の予想とは比較にならない好結果となっている。

以上のことを勘案すると、次のことが言える。

- 1) 学生は一般的傾向に比して、調査的態度をとる割合は低く、支持的・理解的態度を示す者が多い。
- 2) ロール・プレイングを主な手段とした助力的人間関係づくりの授業により、学生は理解的態度の重要性を体験的に理解している。
- 3) 学生が看護婦として実務に従事した場合にも、理解的態度で面接ができるように訓練を続けることの必要性を覚える。

2. 実習目標の達成度調査

1) 「基本的考え方」について；表Ⅳの所感分類で学生が最も多くの反応を示したのは、㉚, ㉛, ㉜の項目であり24名全員(89件)がR, p.l.を厳しい学習で

はあるが、自己反省・自己理解ができ、自主的な人間の育成につながるとしていることである。

人間は変化・成長する存在であるから、カウンセラーはカウンセリング場面において、クライアントの自己理解を助けることを第一義的としなければならない。一方でカウンセラーも共に成長しつつあることを確実に実感できなければならない。その手がかりとして、広瀬は「自分の内面のうごきをたしかめることと、面接後自分の面接の録音を聞きなおして、気づいたところの自分の弱さを、一つ一つ克服していくことである。」と言っている<sup>17)</sup>。また飯田は支援者としての基本的な姿勢の中で「自らの弱さを認め、自己をみつめることは、その人の人間の成長をうながし、相手の立場を理解し適切な援助ができるための第一歩といえる。」と述べている<sup>18)</sup>。

R. p.l. をとり入れた今回の筆者の試みによって、カウンセラーの役割を演じた学生は半数の12名である。しかし全員の学生が面接の相手を理解するためには、先ず自分自身を厳しく見つめることからスタートしなければならないことに気づいている。

次に学生の反応が多かったものは表Ⅳの㉗～㉙の項目である(65件, 22人)。これは当該授業の目的でもあり、学生はR. p.l. により「助力的人間関係」とはどのような関係をいうのかを体験的に理解していると言える。広瀬は「クライアントの気持を本当によく理解するには、面接場面の録音を何度も何度も聞きなおすことが必要である。(中略)何回聞きなおしてもその都度何か新しい発見をするものである。(中略)さらに、逐語記録をつくることにより、耳だけで聞きなおす以上に、いろいろとこまかい事に気づくものである。」と述べている<sup>19)</sup>が、筆者の今回の試みは広瀬の言を地でゆく方策により奏効していると考えられる。

つづいて表Ⅳの㉚と㉛「カウンセラーは、クライアントが自分で結論を出すための援助をすること」に反応したものは18件(16人)である。これに関して大段は、人間としてお互いが成長を促進し合う関係、つまり助力的人間関係が成立するための面接の技法を、一本の樹木にたとえて次のように述べている<sup>11)</sup>。「その人の〈基本的考え方〉とか、人間理解、人生観といったものが根にあたり、〈態度〉は幹にあたり、〈言葉の技術〉は枝や葉である」。またロージャズの「一個の人間は成熟に向かって前進する力と傾向を、たとえ表面にはみえなくとも、潜在的に、その人自身の内部にもっている<sup>20)</sup>」を引用して『根(基本的考え方)』を強調している。しかし今回の調査では〈根〉に関し

ては充分であるとは言えないようである。

また表Ⅳの㉜「主題は参加者の関心が高く発達段階にふさわしいものである」が23件(22人)と多いのは、基礎実習終了後の第4回目に、実習中に遭遇した現実問題を取り上げたことによる。それに対し㉝の「日常生活でも気をつけたい」が12件(10人)と少ない。これらのことからR. p.l. をくり返して行うことにより、今後の日常生活場面に関しても関心が持てるようになるのではないかと考える。

2) 「看護者として必要な態度」について；表Ⅴの調査結果から、標記について次のような考察ができる。

① カウンセラー側の3条件のうち、共感的理解に関する反応が最も多く、中でも㉞の「相手を理解することは難しいが、理解しようと努力する態度が大切である」と考えたものは39件(20人)で高率を示している。

カウンセラーの態度分析調査で述べたように、授業の開始当初では半数の学生は支持的態度を、また約 $\frac{1}{5}$ の者が調査的態度の傾向を示していた。しかし学生はR. p.l. の授業をすすめていくうちに、相手が悩みを訴えた場合には、なぐさめたり・励ましたり、あるいは情報を集めたりすることは、真の援助にはならないということを理解しはじめたようである。そしてロージャズのいう「クライアントの私的な世界を、あたかも自分自身のものであるかのように感じとり、しかも自分の怒りや恐怖や混乱をそのなかに巻きこまないようにする<sup>21)</sup>」という共感的理解の態度をとることの困難性をも学生は痛感している。これは表Ⅳの㉞、㉟、㊱で述べたように、今までの自分の考え方・見方を変えなければならない、という危険をおかすことになるため大変難しい学習になると筆者は考える。しかしこの危険を避けるのではなく、相手を真にわかろうと努力する姿勢を大切にしていきたい、ということも学生は学んでいる。

② 表Ⅴの㉞の次に多くの反応を示した項目は㉟、㊱、㊲であり、いずれも50%以上の者が回答している。これらはそれぞれ、カウンセラーに必要な態度条件の自己一致・受容・共感的理解に含まれるものである。つまり㉟身構えないで純粹・素直であること。㊱本気で聴こうとする積極的態度が大切である。㊲相手の気持を敏感に感じとり・適切に応答すること、というような看護者として具体的にどのような態度で患者と向き合えばよいかを、体験的に学生は学んでいると考えられる。

3) 「言葉の技術」について；表Ⅵのチェック・リ

ストのうち最も多くの反応を示したのは㊸であって、14件(13人)である。すなわち学生は、理解の態度に必要な言葉の技術については約半数が知ったことになる。スナイダーの発言分析では、㊸は感情に対する非指示的な反応の範疇に入っているからである。これについて大段は「カウンセラーが〈理解の態度〉をとろうとするとき、それにふさわしい言葉の技術をとらない、表現上の工夫がうまくゆくならば、その面接場面の進展はぐっと早くなる」と述べて、㊸の重要性を強調している<sup>22)</sup>。

これとは反対に「質問・解釈・批判・是認」などの発言は、理解の態度に結びつかない言葉の技術である(㊶, ㊷, ㊸, ㊹), と答えた学生は42件(19人)である。すなわち㊶～㊹はそれぞれ、調査的・解釈的・評価的・支持的な態度に直結する発言であるということを生徒は学んでいる。

次に㊶, ㊸にみられるように、面接中の〈沈黙の意味〉に注目したものは13人(23件)と、半数以上となっていることを挙げたい。すなわち広瀬によると、面接場面での「沈黙を知る」ということはかなりむづかしい技術であると指摘し、「対話の途中での沈黙を破るのは、クライアントの方であってカウンセラーであってはならない」という主旨を述べているが<sup>23)</sup>、今回のR.p1.学習により、学生がその点に着目できたことは一応の評価をしたい。しかし実際場面での実行については未知であるから、今後に期待せねばならない。

### 3. 付録：学生個々に関する考察と要約

これまで表IV～VIのチェック・リストに従って、項目別に検討してきた。ここでは学生個々の達成度について考察を加える。考察の方法は表IV-2～VI-2に掲示した全項目について、個人別に応答件数を集計するものである。従って個人別の総項目数は28となり、24名の平均応答数は約17件となる。

1) 応答総件数が特に多かった学生について；No.8の学生は34件に回答している。これは24名中最も多く、全員の平均応答数17件の2倍に相当する。その内訳をみると面接技法の三要素<sup>11)</sup>である〈基本的考え方〉(表IV)、〈看護者として必要な態度〉(表V)、〈言葉の技術〉(表VI)のいずれにおいても高い反応を示し、実習の成果が顕著に認められる。

2) 応答総件数が特に少なかった学生について；これに該当する学生はNo.16とNo.24とである。これらの学生は実習目標達成度調査において、それぞれ7件と8件しか回答しておらず全体平均回数の $\frac{1}{2}$ に満たない。

その内訳をみると2人ともに面接技法の三要素の凡てにわたって少ない。また表IIIにおける調査においても、初回と最終回とに変化が認められず、最終回においても調査的・支持的態度のままである。したがって実習の成果が低劣であると言わねばならない。

3) 応答総件数は比較的多いが、その反応に偏りがある学生について；これに該当する学生は4名で、No.6, 18, 19の3名は〈言葉の技術に関する反応〉(表VI)で応答件数が1～2件と少なく、No.12の学生は〈基本的考え方に関する反応〉(表IV)での応答件数が4件と極めて少ない。

この事実から該当する学生はこの授業への関心度は認められるものの、習熟度に関しては不十分と言わねばならない。

4) 応答総件数がやゝ少なく、その反応に偏りがある学生について；これに該当する学生は4名(No.1, 5, 7, 21)で、〈基本的考え方に関する反応〉(表IV)での応答件数については4名ともに平均(8.9)に比して9～10件と多い。このことは4名ともに〈基本的考え方〉への到達度としては満足できるものとなっている。しかし他の要素については欠ける学生である。すなわちNo.1とNo.7の学生については〈言葉の技術〉および〈態度〉のいずれについても満足するものがない。またNo.5については〈言葉の技術〉に関しては全く達成されていないが、〈態度〉に関しては満足できる。No.21についてはその逆である。

本調査結果の考察において、「カウンセラーの態度分析」および「授業目標の達成度に関して」は全体的に好結果であることを論じたが、学生個々については個別的に充分とは言えないものがある(10名)。

## V. 結 論

看護の対象は人間そのものである。したがって広く人間学を考究する必要性に迫られる。すなわち、看護援助に先だって人間的援助が基本となる。

筆者は、有能な看護者の基本には単なる技術学習の優先よりも、常に自己をふり返ることの必要性を論じた大段、広瀬、飯田<sup>7,10,12)</sup>らに同調するものである。今回の報告は、こうした主旨に基づいて実施してきた9カ年のR.p1.による演習を紹介し、昭和61年度に実施した結果のうち二・三の知見を報告している。その一つは授業開始当時と終了時における学生の「相手の悩みをきく傾向」についてであり、第二として授業目標の達成度に関するものである。その結果、次の結論



を得ている。

1. 学生は「支持的・理解的態度」を意識の次元でとろうとする傾向にあって、一般的な傾向としての調査的態度に比べてその割合が多い。さらにR, p1.の授業終了時は、当初に比べ理解的態度の割合が3倍近くに増加している。

2. R, p1.学習により学生は体験的に次のことを学んだようで、筆者が当初に意図した授業目標を大約達成したものと考えられる。

1) 相手を理解するためには、先ず自分自身を厳しく見つめることから出発しなければならない。

2) 面接のための人間観・人生観の確立が必要である。

3) 看護者に必要な態度条件は、自己一致・受容・共感的理解である。

4) 相手を理解することは難しいが、理解しようと

努力する態度が大切である。

5) 面接の技法では「言葉の技術」が重要となる。すなわち①カウンセラーの発言としては〈簡単な受容〉、〈内容のくり返し〉、〈感情の明確化〉という非指示的内容が有効であり、反対に②〈質問〉、〈批判〉、〈是認〉、〈解釈〉という指示的又は半指示的内容は逆効果となり、③対話中の〈沈黙〉の意義は大きいものである。

3. 本授業の目的・目標に関しては、一斉授業の方法としては一応の成果を修めたと確信する。しかし学生個々に関しては充分であったとは言えない。すなわちR, p1.法に関しては初歩的経験は必須なものであるとしても、目的達成に関しては個々人の基本的なあり方、あるいは習熟への方策については別途に考えなければならないことを反省するとともに、この方面の研究者に警鐘を響かせたい思いである。

## 文

## 献

- 1) 合田富美子他：看護の再検討（患者との会話を分析して）、岡山県立短期大学・研究紀要、18、48～57、（1974）
- 2) 千田好子他：患者・看護者の人間関係（会話場面から真の援助を考える）、第6回日本看護学会集録・成人看護分科会、454～458、（1975）
- 3) 千田好子他：苦難に耐えている人との面接から看護のあり方を考える（「人間対人間の看護」を手がかりに）、第11回中国地区看護研究学会集録、29～33、（1979）
- 4) 大段智亮：人間の看護、創元社、大阪、（1973）
- 5) 伊東博訳編：カウンセリング論集1、カウンセリングの基礎、誠信書房、東京、（1965）
- 6) 畠瀬稔編：ロージャズ全集第6巻、人間関係論、岩崎学術出版社、（1968）
- 7) 大段智亮：看護のなかの人間、川島書店、東京、224～234、（1971）
- 8) Travelbee, J.: Interpersonal Aspects of Nursing, F. A. Davis. Co. Philadelphia, 7. 19 (1971)
- 9) 三木福治郎・野島良子：対談・看護理論の構造化とその背景、看護教育、27、541（1986）
- 10) 広瀬米夫：カウンセラーの自己訓練、岩崎学術出版社、東京、79～82、（1982）
- 11) 大段智亮：面接の技法、メヂカルフレンド社、東京、140～141、（1978）
- 12) 飯田澄美子、見藤隆子：看護相談・面接、医歯薬出版株式会社、東京、（1978）
- 13) 4)に前掲、80～84
- 14) 村山正治編訳：ロージャズ全集第12巻、人間論、岩崎学術出版社、東京、93～94、（1974）
- 15) 5)に前掲、125～127
- 16) 長谷川浩編：看護心理学、金沢文庫、東京、75、（1976）
- 17) 10)に前掲、116
- 18) 12)に前掲、29
- 19) 10)に前掲、63
- 20) 11)に前掲、180
- 21) 畠瀬稔編訳：ロージャズ全集5、カウンセリングと教育、岩崎学術出版社、東京、194、（1974）
- 22) 11)に前掲、125
- 23) 10)に前掲、153～154

昭和62年8月17日受理